

「こんな
してま

わだいのこいん

皮相上滑り

明治44年（1911）

8月、夏目漱石が来和し、当時の県議会議事堂で講演を行いました。この時、漱石は44歳。英国留学から帰り、教師を経て文筆活動に入り、東京朝日新聞の文芸記者に迎えられるようになりました。文明開化のもとに、日本は西洋を本手に産業や文化が発展、近代化への道を突き進んでいた頃です。

向があり筆者には簡単ではありませんでしたが、読解してみました。

漱石は和歌浦に泊まり、観光用に設置された日本初の屋外鉄骨製エレベーターに乗って奠供山（てんくやま）に登りました。それを引き合いに「開化が進むにつれ、こういうせいたくなものが増えてくる」。せいにくになる競争になり、生存競争から生じる不安や努力でむしろ苦しむ、苦痛なのは開化が生んだパラドックスだと言っています。

また、内発的というのは内から自然に出て発展

漱石の近代批判

漱石が乗った和歌浦のエレベーター



化は、外発的であるがために「皮相上滑りの開化である」と断言しています。

漱石の「自己本位」とは自分勝手の意味ではなく、「他の存在を尊重すると同時に自分の存在を尊重する」という解釈だと別の講演で言っています。漱石はロンドン留学中に自分のアイデンティティを見失った時、この言葉の発見により救われたのです。

外部の影響を受けざるをえない状況でどのような発展方法をとるのか。この点、「自己本位」は今日の地域再生における自律的な方向性に通じます。

すること、ちよつど花が開くようにおのずから蕾が破れて花弁が外に向かうのをいうが、日本の現代の開化は、急に外からおっかぶさった他の力やむをえず形式だけを取り込んだので外発的だ。ナイフやフォークを使うのも、西洋人が「我々より強い」から己を捨てて真似をしているだけ。「自然と内から発酵して醸された礼式でないから取ってつけたようで見苦しい」と批判。日本の開

今でも耳の痛い指摘。大学教授の比喩は、西欧が100年かけて内発的に発展したことを日本はわずか数十年で達成しようとしており、しかし神経衰弱にもならず、皆ピンピンしているのは、「上滑りの真似、嘘の発展」だから、と言っているのです。

外部に開きながらも内では自らの価値観をしっかりとつくり、主体的に存在するあり方です。漱石の外部と内側とのあり方に対する文明批評は、お

そらく世界でも早い段階での「内発的発展論」の提示だったはず。己と他を同時に尊重する能力を見失った日本は、その後の戦争へと突き進んでいきます。「日本の将来に悲観しなくなる」と漱石は講演を結んでいます。日露戦争に勝利し、日本も世界の「一等国だ」との高揚した世相の中で、有名な文豪の話聞きに1000名以上も集まった和歌山の市民らに漱石の悲観と危機感を通じたでしょうか。

自己本位

さらに、日本は200



夏目漱石（漱石全集第9巻）大正14

プロ
フィル



湯崎真梨子（ゆざき まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている